様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６３０
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６６１２

研究課題名（和文）戦後日本における産業技術の高度化とナショナリズムの変容に関する歴史社会学的研究

研究課題名（英文）A study of historical sociology on nationalism and industrial technologies in postwar Japan

研究代表者
新倉　貴仁（NIIKURA, Takahito）

成城大学・文芸学部・専任講師

研究者番号：５０７５７７２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後日本におけるナショナリズムの歴史を、産業技術の発達との関係から考察した。とりわけ、戦前から戦後社会に連続している「能率」の概念に注目し、それが大量生産の原理としてだけでなく、人々のライフスタイルにかかわるものであることを明らかにした。これは、産業技術の問題を通じて、ナショナリズム研究とメディア論との関係をあらためていちづけなおすものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to scrutinize the history of nationalism in postwar Japan by considering its relationship with the development of industrial technologies. First, this study examines the concept of “efficiency,” that continues from prewar to postwar society with the technological innovation of automation. Second, it demonstrates that efficiency has been a principle not only for mass production, but also for the lifestyles of middle class people. Third, it reframes the relationship between nationalism and media by focusing on the development of industrial technology from efficiency to automation.

研究分野：社会学

キーワード：ナショナリズム　メディア論　能率　オートメーション　産業合理化　ミドルクラス　大衆社会

１．研究開始当初の背景

1990 年代以降、グローバル化を背景に、日本ではナショナリズムをめぐる議論が隆盛してきた。とりわけカルチュラル・スタディーズやポストコロニアリズムの紹介は、ナショナリズムについての学際的、国際的な研究を促進してきた。これらの研究は、しばしば、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』やホブズボームらの『伝統の創造』の議論を援用し、ネーションの構築性を明らかにすることをめざしてきた。だが、2000 年代に入り、グローバル化にともなう社会的不平等が拡大していくにつれ、ネーションの構築性を批判する議論に対する疑義が示されるようになる。しかし、文化に対して経済を対置し、論理に対し心情を対置することは、これまでのナショナリズム研究の学説史のなかで繰り返されてきたことである。

構築主義的ナショナリズム研究は、次の二つの点から刷新される必要がある。

第一に、ナショナリズムの理論的考察である。とりわけ『想像の共同体』はネーションの構築性を指摘する議論ばかりが注目されてしまっている。だが、アンダーソンの議論はネーションの近代における成立を踏まえたうえで「なぜそれが愛着を生み出すのか」と問うものである。また、そのナショナリズム論は印刷というメディア技術とのかかわりを論じている。だが、それは、メディアがイデオロギーをメッセージとして伝えるという議論や、国民的メディアの発達がネーションを想像させるという議論だけにとどまるものではない。印刷技術という技術の社会的な質が、ナショナリズムという社会と個人との関係についての想像力と深く結びついていることを考えなければならない。

第二に、近現代日本におけるナショナリズムの言説の再検討である。すでに小熊英二は『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社，2002 年）の中で、戦後、革新を標榜する立場からナショナリズムが肯定的に論じられていたこと、そのような革新ナショナリズムが 1970 年ごろを境に勢いを失っていくことを描き出している。だが、小熊の議論は、このようなナショナリズムの変容を戦争経験に相関させる点で十分ではない。なぜなら、同型のナショナリズムが、第一次大戦後の文化主義者たちにまで遡って観察されるからである。すなわち、ナショナリズムは戦争経験との相関ではなく、戦前戦後と持続し、高度成長期に変容する問題との相関から思考される必要がある。それは、産業資本主義の発達であり、それを支える産業技術の問題である。

ナショナリズムは産業技術との相関で考察されるべきである。そして、そのような産業技術とは生産の現場を司るだけではなく、同時代に生きる人々の生の様式に深く関与する。このような視点において、ナショナリズムとメディア技術の関係が再考され、近現代日本におけるナショナリズムの歴史を再記述する必要がある。

２．研究の目的

最終的な目的は、近代日本におけるナショナリズムの展開を手がかりに、社会現象としてのナショナリズムを総体的に解明することにある。本研究では、1960 年代から 1970 年代にかけてのナショナリズムの言説の変容に注目し、その背後にある機制を明らかにすることを目指す。

特に重要なことは、戦後から高度成長期にかけて導入された新しい生産技術としてのオートメーション技術と、それにともなって普及する経営学や情報学といった新しい学知である。第一に、これらの技術は、ホワイトカラー層の拡大を引き起こし、従来の階級対立の議論では説明のつかない巨大な社会層として、ミドルクラスを生み出す。第二に、これらの技術は、膨大な量の商品を生産、供給することを可能にし、より全域的な大衆社会化を可能にする。そして、第三に、経営管理や情報技術をめぐる知は、マイホーム取得のための資金のやりくりなど、人々の日常生活へと拡散していく。このなかで、都市と農村、近代と前近代といった、日本社会のさまざまな「二重構造」が解消し、ナショナリズムについての言説も変容していく。

オートメーション技術は、複製技術（機械による再生産 mechanical reproduction）が高度化したものであり、メディア論とナショナリズム論が交錯する重要な対象である。この領域を踏破することを通じて、従来のナショナリズムをめぐる問題の地平を刷新することをめざす。

３．研究の方法

従来のナショナリズムをめぐる議論は、構築と本質、市民と民族、イデオロギーと心情、文化と政治などのさまざまな二元論的構成をもっていた。それに対し、本研究はナショナリズムの本質を「中間」に見出す。なぜならネーションとは、印刷技術を通じて普遍（ラテン語）と特殊（俗語）のあいだに成立する出版語に対応する「想像の共同体」だからである。このとき、マルクス主義にとってネーションとミドルクラスが二つの大きな理論的蹉跌であったことが想起されるべきである。ミドルクラスとは、大量生産技術の進展によって広範に生じていく社会的集団である。すなわち、複製技術（機械による再生産）は、ネーションとミドルクラスという二つの問題を結びつける。

戦後日本におけるナショナリズムの変容を考えるにあたって、そのイデオロギーとしての側面だけではなく、産業技術の高度化と、それにともなう大衆社会化、そしてミドルクラスの生の様式に注目する必要がある。本研究は、（１）戦後日本における知識人におけるナショナリズムの言説の変容を追跡し、その問題の領域をより明確にえがきだす。さら

に、（２）オートメーション技術や経営学などの学知を含んだ産業技術の進展を歴史的に追跡し、それが関与する問題系を明らかにしていく。以上の二つの研究を通じて、（３）メディアとナショナリズムの関係についての刷新を目指す。

４．研究成果

（１）戦後思想史の再考

高度成長期を通じて鋭く対立する吉本隆明と丸山眞男の関係を中心に、戦後日本におけるナショナリズムの言説の変容を考察し、「戦後社会」の再検討を行なった。

第一に、吉本隆明の転向論は、高村光太郎を論じるなかで特に都市のミドルクラスとしての属性に注目するように、日本社会にそなわる二重構造に由来する現象として論じるものである。この議論は、同時期の二重構造についての言説に内属している。

第二に、二重構造の言説を背景におくとき、吉本隆明と丸山眞男は 1960 年代における鋭い対立の印象とは異なり、同一の課題――現代社会化と共同性の創造――に向っていたことが明らかになる。とりわけ吉本は、『共同幻想論』において、個人幻想と共同幻想という軸とは異なる「対幻想」の領域を導入している。この領域を吉本は家庭に重ねる。この点で、吉本の思想は、高度成長期に進行する核家族化とサラリーマン世帯（都市のミドルクラス）がもつマイホームへの夢に相関するものであった。

高度成長期の終わりに生じた丸山と吉本の対立は、両者の思想の衝突という以上に、〈戦後〉という時代が高度成長を通じて変容していくことを示すものである。これは、戦争経験に限定されない戦後思想を再考するという課題が示すものである。

（２）「能率」の問題化

（１）の議論の背景にある高度成長とは、生産技術の革新――電子計算機やオートメーション技術の導入――を通じて進行していったものである。本研究では、産業技術の変容の追跡を通じて、次の二つのことを明らかにした。

第一に、戦後における産業技術の変容の問題のひろがりである。日本生産性本部を中心として導入されたオートメーション技術は、製造業や化学工業などの実際の産業に応用されるだけでなく、電子計算機の導入を通じて社会における生産・流通・消費の諸側面に大きな変容をもたらした。そしてさらに注目すべきことは、このようなオートメーション技術が生産の水準を超えて、人々の生活の中に浸透していくことである。特に経営学をめぐる大衆向け出版物が増大し（マネジメント・ライブラリー、マネジメント新書）、マネジメントやオペレーション・リサーチ、品質管理（ＱＣ）などの知識が普及していく。同時に、このような経営学の知識の普及は、線形計画法や統計などの情報学の知識の普及をともなっている。本研究がより注目することは、この生産と生活をめぐる知の進展の中心に「能率」の概念が置かれていることである。サラリーマンは「能率」的な主体となることを目指し、さまざまな無駄を合理化していくことをめざす。このような計画や組織を通じた変革は、戦前における「大衆」の概念が持っていた機械との関係に他ならない。すなわち、戦後の「能率」は戦前から連続しているのである。

第二に、戦前における「能率」の概念の広がりを明らかにした。なお、当初の計画では戦後の産業技術にのみ焦点をあてる予定であったが、研究の進展とともに戦前の産業技術――とりわけ「能率」――の重要性が明らかになってきたため、射程を戦前にまで伸ばしている。

「能率」の概念が注目されるのは第一次大戦前夜にフレデリック・テイラーの科学的管理法が導入されることによる。だが、この「能率」は、工場以外に会社・商店・銀行などにひろがっていく。このことについて 1924 年と 1935 年に開催された二つの「能率展覧会」の展示内容を比較、分析を行なった。

時局の展開にともない「国際経済戦線」や「国産愛用」といった言葉が登場するが、両者は産業技術の高度化という同一の線上にある。とりわけ、産業にまつわる様々な側面が、計算・考量可能な諸要素へと分解されていく。すなわち、企業や工場の組織編成、照明や通気や温度や湿度や騒音といった環境、規格や標準化、工程や在庫の管理、原価計算や予算統制といった会計の技術、栄養や睡眠や疲労から適性検査までをも含んだ労働者の身体への配慮、商店や事務、運搬、交通、通信機関、学習、そして家庭生活などである。同時に、これは計測・考量を可能にする様々な記録技術をともなっている。

以上の考察は、「能率」をめぐる問題系の大きさを示唆するものである。1960 年にダニエル・ベルが発表した論文がベンサムのパノプティコンの問題からはじまったように、能率はフーコーが定式化した規律訓練権力と重なり、大量生産を展開すると同時に、人々の身体を変容させる。また、オートメーション技術は、フィードバックを原理として、情報を通じた生産の制御により生産性の向上をめざすという点で、能率の高度化にあたる。生産技術の変容を通じた制御技術の到来、そしてそれにともなう身体の変容が、本研究を通じて姿をあらわしきた領野である。

（３）ナショナリズムの問題の再設定

以上の（１）戦後思想の再考と（２）能率の問題化を通じて、本研究は、ナショナリズムの問題をあらためて枠付けなおすものである。

第一に、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論の意義を改めて論じ、その先

の課題となることを示した。ナショナリズムが出版資本主義とむすびつくことは二つの重要な意義をもつ。第一に、ネーションの領域が出版語の領域と重なるように、ネーションは普遍（ラテン語）と特殊（俗語）のあいだに生じる。第二に、出版資本主義が印刷という最初の機械的再生産（＝複製技術）を通じて生じるものであるように、ネーションの問題の根幹にはメディア技術の問題がある。このような観点から考えるならば、ナショナリズムの問題は従来のような社会意識や思想の問題ではなく、また経済的な状況によって決定されるものではない。ナショナリズムとは大量生産技術と相関する現象なのである。

第二に、このような出版資本主義とナショナリズムを論じる先行者としてマクルーハンの『グーテンベルクの銀河系』を位置づけ、その議論が戦後のアメリカにおける大衆社会化を背景としていることを明らかにした。さらに、マクルーハンの議論は、機械を通じて人々の身体感覚が変容していることを示唆するものでる。これは、一方で、戦前からつづく機械やモダニズムの議論の系譜にあり、他方で、戦後に生じた「通信と制御の理論」としてのサイバネティクスの議論に接続するものである。

以上の考察は、一方で、ナショナリズムに相関する重要な問題としてあらためて産業技術の問題をしめすものである。そして、他方で、メディア論という問題が同様に産業技術の変容と深く関わることを示唆するものである。近年、これら機械的に複製されるメディアに対して、コンピューターなどのデジタル技術を用いるメディアを「ニュー・メディア」とよび、その社会学的意義が考察されつつある。このことは、従来のメディアと深く結びついていたナショナリズムの変容という問題をひらく。また、本研究は、1980 年代以降のＰＣやインターネットを念頭において情報化を論じる立場に対して、1950 年代にまでさかのぼって日本社会の情報化を再考しなおすという視座を提出するものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 新倉貴仁、「「メディア論」再考――マクルーハンにおける産業社会とナショナリズムをめぐって」、『コミュニケーション紀要』、査読無、27 輯、2016、1-10

② 新倉貴仁、「「想像の共同体」を越えて」、『思想』、査読無、第 1108 号、2016、42-62

③ B.アンダーソン著、山本信人・新倉貴仁訳「インドネシアのナショナリズム、その現在と未来（原題：Indonesian Nationalism Today and in the Future)」『思想』、査読無第 1108 号、2016 年、24-41

〔学会発表〕（計　３件）

① NIIKURA, Takahito, Reframing the Concept of “Mass” in Postwar Japan, Association for Asian Studies 2017 annual conference, Toronto（Canada）, 2017 年 3 月 16 日

② 新倉貴仁、「近代日本と産業合理化――「能率」をてがかりに」、第 89 回日本社会学会大会、九州大学（福岡県・福岡市）、2016 年 10 月 8 日

③ 新倉貴仁、「個人と共同体のあいだ――戦後思想としての吉本隆明」、日本政治学会 2015 年度研究大会、千葉大学（千葉県・千葉市）、2015 年 10 月 10 日

〔図書〕（計　２件）

① 新倉貴仁、『「能率」の共同体――近代日本におけるミドルクラスとナショナリズム』、岩波書店、2017、338 頁.

② 新倉貴仁、「吉本隆明――個人と共同体のあいだ」、大井赤亥・大園誠・神子島健・和田悠編『戦後思想の再審判――丸山眞男から柄谷行人まで』法律文化社、2015、126-144

〔その他〕

ホームページ等　なし

講演会

① 新倉貴仁、「皇居ランの比較社会学」、東アジア観光文化研究会シンポジウム「観光空間としての東アジア」、北海道大学（北海道・札幌市）、2015 年 8 月 1 日、招待あり

６．研究組織

(1)研究代表者

新倉　貴仁（NIIKURA, Takahito）
成城大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：50757721